

# 乙島東社協だより

「こ」挨拶

## 神頼み

会長 小野 貢



平成三十年は、近年まれにみる豪雨災害の年となった。私たちの地区社協でも、ボランティアとして、個人や各種のグループや団体で、被災地区やボランティアセンターで活動を行った。

ところで、私たちが日々の生活のなかで出来る減災対策もたくさん考えられる。

地域内の不安箇所の安全点検活動なども一つに挙げられるが、それ以上に隣近所との良好な関係作りこそが大切なことだ。他人事ではなく、親身になって地域で取り組むことが喫緊の課題ではないだろうか。

さて、苦しい時の神頼みという言葉がある。今年、初詣で、吉備津神社にお参りをした。少しあつかましいかとは思ったが、折角のことだから、四つも五つもお願いをした。さすが、国宝という厳かな佇まいで、また人生を豊かにしてくれるパワースポットと言われているだけに、参拜者も後を絶たない。また、本殿の参拝後に鳴釜殿を見せたいだけだ。煤で黒ずんでいる小さな神殿の中で、大きな釜に湯が煮えたぎっていた。この中に一升の玄米を入れた時に生じる音の強弱や、長短で吉凶を占うという神事だ。とにかく、その鳴釜の音に負けないような隣近所同士の和やかなあいさつ、楽しそ

うな大声やにぎやかな笑い声を響かせるまじろを目指したいものだ。占いやおみくじというたぐいのものも沢山ある。信じるも信じないのも本人次第だ。多少とも物事を進める後押しをしていてくれる思いになれるのは私だけなのだろうか。今年こそはと願う神頼みだ。



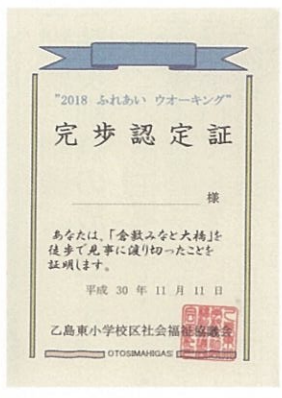
**全員が渡り切った**  
**「倉敷みなど大橋」**  
**ふれあいウォーキング**

めつたとなない最高の秋日和のウォーキングでした。十一月十一日(日)、乙島東小学校に幼児から高齢者までの百二十余名が集まり、午前九時に、一斉にスタートした。片道二・五キロメートル少々距離を橋の東詰めで受け取る「完歩証」をめざして歩いた。

瀬戸内海をあらためて見る新鮮な風景も、また高梁川の河口の真ん中から上流を望む雄大な景色、数々の経験が生まれた。参加者に、幼児の手を引きながらの親子連れや、また老人車を押しながら完歩した高齢者もいたのは印象的であった。小さな子供たちとたわいもない話をしながら、また隣の町内の方と久しぶりの会話を交わしながら歩いた。一時間もすると着いたと、淡々と語る。やがて、「完歩証」を手にする。休憩もとらず、すぐに折り返す人が多かった。午前十一時過ぎには、

ほぼ全員が無事に校庭に戻った。異口同音に、一人ではなかなか歩いて渡る気にはならないが、皆さんと一緒にだから完歩できたという。周りに人がいることで、できそうにないことも出来る元気と勇気が出ることに気づいた。

いづれの参加者にとっても、今日の天気と橋の上からの眺めは、いい思い出作りとなったのに違いありません。



## 二世世代交流

### 「ニコニコ顔で」満悦

#### グラウンド・ゴルフ



さわやかな秋晴れの十月十三日(土)に乙島東小学校校庭で、「二世世代交流グラウンド・ゴルフ大会」が行われた。午前八時からの受付には、次々とプレイヤーたちが集まった。

ラジオ体操の後、各選手たちは、赤色、青色、そして黄色のコースに就き、ホイッスルの合図で一斉に競技に移った。ホールインワンを入れた子どもは、周りの「オー」と



いう歓声に、日頃見せたことのないような笑顔を見せてくれた。休憩を挟みながら、三ラウンドを回った。

小学生二十六名、保護者二十名、高齢者四十名の総勢八十名を超える選手が気持ちよい汗を流して終了した。参加した子どもたちは「楽しかった。来年も参加したい。」



保護者達も「わが子と一緒にプレイできて、また、グラウンド・ゴルフがこんなに楽しいものとは」と、高齢者は、子どもたちに、打ち方を教えたり、ルールやマナーを話して、ニコニコと満悦の様子だ。まさに二世世代交流という大盛況のふれあいグラウンド・ゴルフ大会であった。



## 平成三十年度

### 総会および講演会

本年度の総会が、平成三十年五月二十七日に「乙島憩いの家」で開催された。

「平均寿命は順調に伸びてきているが、それと同じように健康寿命を伸ばすことに地域で取り組みましょう。」と会長が話された。

また、地域の各所での百歳体操教室や世代交流のふれあい事業などに参加して、実践を重ねていこうと誘われた。次に、議事に移り、事業および会計について決算および予算が承認された。

つづいて、記念福祉講演があった。元オリンピック選手の岩田洋介先生が「健康寿命を伸ばす、今からできること」という講演をされた。先生は、ウエイトリフティング競技の選手で、現在は高校教諭で後進の指導に当たっている。

ロサンゼルス、ソウル、そしてバルセロナと三回のオリ

ンピックに連続出場し、入賞もされている。オリンピック選手の裏表や選手生活のエピソードなど話は尽きない。やっと本題に入った。高齢者に限らず、誰でも、今からでも取り組めることだ。それを、まず見つけることだ。そして、それをすることで、周りから感謝されることはないだろうか。また、今から始め



られ、入賞することを目標にできるようなスポーツはないだろうか。とにかく、どんなことでもいいから、今から自分ができるようなことを、まず見つけて、それを継続することだ。健康寿命を伸ばす一つになるのではと提言された。

もちろん食事や睡眠は大切なことで、よく、付け加えて話され、締めくくった。



### 歳末もちつき大会

十一月十六日は、午後から雨という予報であった。そのために、時間を早めて、朝の七時から始めるもちつき大会となった。

もち米一俵の十九臼も、午前中につき終わることができた。幼児から高齢者まで二百人



近い参加者だった。用意した小さい子供用の杵で、掛け声に合わせ、恥ずかしそうにつく幼児の顔。高齢者のもちを丸める見事な技に満悦な顔。早速に、つきたての餅を持って、民生委員が、手分けをして学区内の独居の高齢者宅を訪問した。特に、もちの食べ方については、注意を促した。一年を締めくくり、来る年の平穩を願った行事であった。

### 乙島東地区 小地域ケア会議

一緒に百歳体操 やりませんか

平成二十一年に立ち上がったこのケア会議も、第四十七回を迎えました。今では、三か月に一回のペースで、主として地域の中



### 防災連絡会議

「訓練。訓練。」 「防災訓練の放送です。」

「クラレの工場内で...」 その場で待機して次の放送を待っていただく。という内容の放送が十月三十日(火)の午前十時過ぎに、あちこちの町内の放送塔からあった。私たちの地域は、大きな工場群と隣接した住宅地でもある。地震や洪水という種の災害だけでなく、工場火災も予想される。このような災害に対しては、私たち住民はどのように構えていたらいいのだろうか。今回は、クラレの火災の状況を、地域防災担当者が直接に、工場から聞き取り、各町内会の担当者に連絡し、それを住民に放送な

での困難事例の早期発見と対応などに向けての話し合いを進めています。メンバーは、民生・児童委員、愛育委員、栄養委員等、それに町内の代表や地区社協の関係者らで構成し、いつも高齢者支援センターの職員や関係行政機関の職員らが参加して運営しています。最近では、地域の資源マップ作りと、危険個所の点検について取り組んでいます。このマップについては平



どで伝達する訓練であった。今後は、さらに有効な手段を検討することが必要だ。その日のうちに憩いの家で、防災研修会が実施された。「今、やっておくこと」という演題でくらしき防災士会の福島会長から、防災の基本的な話を、お聞きした。その中で、まず、ママ友と同様に、「防災友」を県外に作っておくことの大切さを教えられた。災害時には、電波事情が悪く、近隣同志では、連絡も取りにくいそうだ。そこで、遠く離れた、親せきか、友達に、我が家の「防災友」になってもらって、家族の安否連絡の中継者になってもらうというこのようだ。次に大切なことは、非常袋を用意しておくことだ。実際に避難生活が始まるまでの、数日間の必要最小限のもの

成三十年三月号の「乙島東社協だより」に掲載しました。続いての危険個所の改善問題については、倉敷みなと大橋の開通により朝夕の通勤時に地域の生活道路にまで入り、迂回する車が増えた。また、玉島の森など周辺の信号機の少なさも、人命にかかわる重要事との提起もあった。そこで、駐在所の巡査や行政相談委員の出席もいただき改善に向けて話し合いが進め



を、リュックなどに詰めしておくことだ。備えあれば憂いなく、さらに重要なことは、正確な状況をつかむことだ。それには「こくち」というFM倉敷のラジオを家庭に備えておくことも役立つと教わり、有意義な研修会となった。

られていくところです。さて、百歳体操教室が、一週間に一回から月に一回の割合で養父公民館、坂田町公会堂、小高地公民館、高崎公会堂、そして高後沖集会所で実施しています。地域の誰でもが、参加し気楽に楽しめる場所、これこそ「通いの場」です。多くの皆さんの参加を期待しています。(玉島東高齢者支援センター)



高崎子供会が「トピックス」の「仲よし会」の名前で船出 少子高齢化、女性の社会進出、核家族化そして子供たちの習い事などの多忙化であるうか、それとも子供会育成者の不足や多忙のせいなのか、多くの町内でも、子供会の入会者の減少が目立ち、子供会が消滅したという話を聞くことが多くなってきた。その例に漏れず、高崎町内でも、ここ二、三年前から話が出ていた。世帯数三百を超えて通学しているために、二つの子供会があった。ところが、平成二十八年ころから、子供会の入会者はどちらも十人程度になった。そこで、町内会の役員たちが、会議を重ね、町内会がバツ

クアップしてでも、子供会を存続させることが必要との結論となった。どちらの小学校の児童であろうと、また町内会に入会しているかどうかにこだわらず、とにかく高崎の子供たちが一つになって、シニア(老人会)も含めた三世代交流で笑顔のあふれる町内を構築することである。そこで、高崎「仲よし会」という名前です。平成三十年に再出発したところである。平成三十年の秋祭りにには多くの子供たちで一基の子供千歳衆をいきおいよく練り歩き、町内の住民から多くの声援と御花料をいただいた。十二月は、公会堂でクリスマス会を実施した。これにも多くの幼児づれの親子が参加された。現代を希薄な社会という人もいますが、誰がそうさせたか考えさせられる。いつか、誰でもが、子供会の育成者や町内会に協力できる、そんな大人に育ってほしいことを念じつつ、町内の皆で子供たちを応援したいものです。

